

大学新入生の 「トモダチ作り」を考える

学生の出身地域がより広範な大学における新入生の人間関係は、入学前教育から始まり、入学式、オリエンテーション、履修登録などを経て構築されることとなる。

充実した学生生活や生涯の友人を得ることが、学生生活の満足度にもつながることは想像に難くない。日本私立大学連盟が2014年秋に実施した、第14回「学生生活実態調査」単純集計（速報値）では、「課外活動に参加している目的」として「友人を得る」「学生生活を楽しむ」が上位二つに挙がっている。一方で、「自分のことをなんでも話せる友人の有無」については、「いない」と回答した学生も約16%に上り、最近では学生食堂に一人で食事を取ることのできる「ぼっち席」が設けられて好評であるといった事例からも、人間関係を構築することが面倒だと感じたり、他人とうまく付き合うことができないなど、対人関係の悩みを抱える学生が一定数いると考えられる。

こうしたなか、各大学においては、他人と付き合うことが面倒、友人づくりのきつ

かけがないなど、さまざまな学生がいたといった現状を受け、新入生のより円滑な人間関係構築のために、行事（イベント）の活用事例、在学生（上級生）によるサポート事例など、さまざまな形の支援が行われている。その一方で、「大学1年生はもう大人である」という考え方もあり、個々の大学では新入生の「トモダチ作り」にどこまで関与すべきか悩んでいる現状もあると思われる。

そこで、本特集では、新しく大学生活を始める新入生の初期の人間関係構築に焦点を当て、新入生の人間関係の構築を大学による現状施策の一つとしていかにサポートしているかという事例を紹介する。

現代青年のトモダチ事情

岡田 努氏

●金沢大学人間社会研究域人間科学系教授

オリエンテーション・キャンプ

—上智大学新入生のトモダチ作り

小幡 富志男氏

●上智大学学生局長

新入生歓迎セミナーについて

—専修大学における試み

阿藤 正道氏

●専修大学商学部教授・学生部長

学生を孤立させない取り組み

—ビッグシスター・リトルシスター制度を中心として

西村 公雄氏

●同志社女子大学学生部長

学生寮（教育寮）と新入生キャンプ

—順天堂大学のとりくみ

長岡 功氏

●順天堂大学医学部教授・学生部相談役

松本 顕氏

●順天堂大学医学部准教授・啓心寮総寮監

現代青年のトモダチ事情

岡田 努 ● 金沢大学人間社会研究域人間科学系教授

1 友人関係の意義と友人関係の希薄化

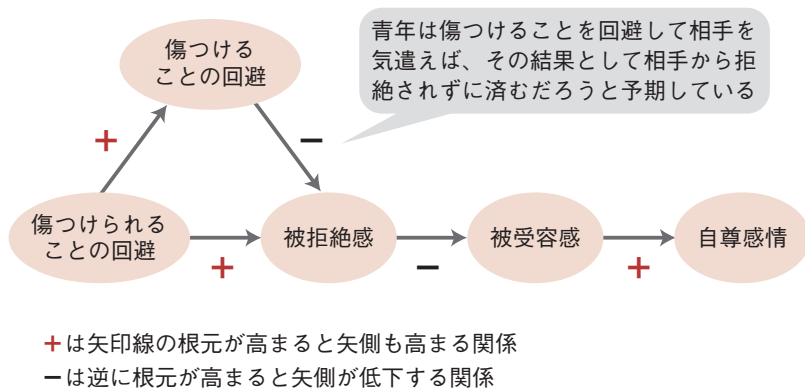
青年期（おおよそ中学生ころから大学生ころ）は、その人の心に大きな影響を及ぼす親密な友人関係が育まれる時期だと言われている（岡田、2007）。青年は友人の中に自分自身の理想の姿（モデル）を見いだし、それに同化しながら、次第に「自己評価・自尊感情」と呼ばれる自分自身の価値の判断ができるようになっていくと考えられている。

しかし、近年、友人関係を中心として若者の人間関係が希薄化してきたと言われている。表面的には楽しそうに振る舞っているが、深い内面的な関わりを持とうとしない、あるいは人と関わることを避けて、一人で自分の世界にこもる若者が増えているというものである。岡田（2007）はいこれらの言説を、関係の希薄さ、見かけ上のノ

リのよさによる「群れ」、傷つける／傷つけられることへの恐れによる「やさしさ」という3つの特徴に分類した。

2 他者に気づかない自分を保つ

現代は、人や組織の行動やアウトカムが常に評価にさらされ、勝ち負けがシビアに判定される時代である。言いかえれば、他者からの評価が個人の価値を決める重要な判断基準になっていると言えよう。身近な対人関係の場においても例外ではない。土井（2008）は、現代青年は互いの対立があらわにならないように、相手を傷つけないように、空気を的確に読み取るようにといった関係様式のもと、身近な人間から承認を受け続けることとしていく。岡田（2011）は高校生、大学生に対して友人関係と自尊感情の関連についての調査を行った。その結果、青



青年の友人関係から自尊心にいたる心理のプロセス
岡田（2011）に基づいて再構成

年は親しい友達との間で、互いに傷つけ合わないよう
気を遣うことで、友達から受け入れられる関係を築き、
それによって自分の自尊心を維持するという一連の心
理的プロセスがあることを見いだした。さらにその際
には、相手から傷つけられないように気をつけるだけ
ではなく、相手を傷つけないように気を遣うことが、「友
達から拒絶されていない」「受け入れられている」とい
う感覚につながり、それが高い自尊心を形づくること
が示された（図）。このように現代の青年にとって、互
いに傷つけあわないように気遣い、相手から拒絶され
ず受け入れられることが、自分の価値を見いだす重要
な要素になっていると言えよう。

3 ランチメイト症候群

昼食を一緒に食べる相手（ランチメイト）がなく、一
人で昼食を食べる姿を見られるのが怖い、友達がいない
と思われるのがいやで隠れて食事をするといった若者の
姿が注目を浴びている。町沢（2001）は昼食を一緒に食
べる相手（ランチメイト）がいない悩みという意味で、
これを「ランチメイト症候群」と呼んでいる。辻（2009）
は、こうした行動の背景には、友達がいないことへの他

者からの視線のプレッシャーがあるとしている。もちろん、現代社会における評価プレッシャーは若い世代だけのものではない。しかし、自分がどのような存在であるかについての評価基準が未完成な若者にとっては、他者からの評価の視線はよりいっそう重くのしかかるだろう。

大学が「友達づくり」を支援する際にも、このことは留意すべき点の一つであろう。学生にとって大学や教職員は、第一義的には学生を教育、監督し評価する存在である。そうした評価的まなざしが、ただでさえ対人関係上の評価にさらされ苦痛を感じている青年にさらなる重圧を与えてしまうようでは、本末転倒であろう。カウンセリングセンターなど、中立的な立場のスタッフが前面に出るといった工夫がなされるか、そうした資源が限られる場合、よりデリケートな注意が必要だろう。

一方、大学図書館や学生食堂で「お一人様席」「ぼっち席」などと呼ばれる一人用の席が人気を呼んでいるという（産経新聞社、2015など）。いわば、「一人で食べていてもよい」と大学（店舗）がお墨付きを与え、「周囲の視線」とは別の評価を与えることで、学生が安心して「一人でいられる」場を持てるということかもしれない。

青年期は親密な友人関係を求める反面、あえて孤独を

求め自分自身を見つめる時期でもある。その孤独感を通して、青年は他者の個別性を認めつつ理解・共感できるように成長していく（落合、2002a）。そう考えた場合、友達と楽しく過ごす時間だけでなく、一人で自分自身を見つめる時間や場も必要だろう。「お一人様席」が、「安心して一人でいられる場」を提供できているのであれば、意義あることかもしれない。

4 大学の支援とその限界

落合（2002b）は、親には子どもの成長に応じた異なるタイプがあるとしている。すなわち、生まれたばかりの乳児期には、子どもの状態をすべてわかりすべての欲求を満たす「子どもを抱え込む親」、小学生などの児童期には、目の届く範囲で見守りながら危険から守る「子どもを守る親」、青年期には「子どもの成長を遠くにあつて念じる親」を望ましい姿としている。そして、子どもが十分成長しているのに、より年少の子どもに合わせた態度で接することは、子どもの成長を止めてしまうことになるという。

親だけではなく、大学など青年を育てる者にとっても同じようなことが言えるのではないだろうか。昨今は、

大学においても学生の全生活を包括的に把握しケアすることが、設置形態を問わず強力に推し進められている。心の健康状態はもとより、家族の状況、友人関係や恋愛関係など対人関係の形態、サークルやアルバイトといった学内外での活動状況など、学生の生活空間全般を教職員が把握し記録することが望ましいと考えられ、少しでも「踏み外しそう」になれば、すぐに手をさしのべて軌道修正をさせることが次第に求められるようになってきているようである。しかし、こうした「ケア」も行き過ぎれば単なる管理や監視になってしまうし、ケアに名を借りた「組織防衛」という本音が垣間見える時もないわけではない。学生を「抱え込む」形で生活全般にわたる面倒をみてやれば、とりあえず問題は解消するだろう。しかし、学生はやがて卒業し社会に出ていく（自立していく）存在である。決して見捨てるという意味ではなく、必要な支援にたどり着きやすい環境作りをしながらも、少し遠くから成長を見守りつつ、最後は自力で自分の問題を解決できるように導くといった意識も、教育機関としてはある程度残してもよいのかもしれない。



●引用文献

- 土井隆義 (2008)．「友だち地獄——「空気を読む」世代のサバイバル 筑摩書房」
- 町沢静夫 (2001)．「ランチメイト症候群について 学校保健のひろば」23, 84-87 大修館書店
- 岡田努 (2007)．「現代青年の心理学——若者の心の虚像と実像 世界思想社」
- 岡田努 (2011)．「現代青年の友人関係と自尊感情の関連について パーソナリティ研究」20, 11-20.
- 落合良行 (2002a)．「あなたには親友がいるか——友人関係」
- 落合良行・伊藤裕子・齋藤誠一 ベーシック現代心理学 4『青年の心理学』（改訂版）有斐閣 pp.153-169.
- 落合良行 (2002b)．「親離れとはどうすることか——親子関係」
- 落合良行・伊藤裕子・齋藤誠一 ベーシック現代心理学 4『青年の心理学』（改訂版）有斐閣 pp.139-151.
- 産経新聞社 (2015)．「もう1人でも怖くなこ」大学公認「はっち席」学食に広がる 産経ニュース2015年1月12日 <<http://www.sankei.com/premium/news/150112/prml1501120011-n1.html>>
- 辻大介 (2009)．「友だちがいないと見られることの不安 月刊少年育成」54, 26-31 大阪少年補導協会

大学新入生の「トモダチ作り」を考える

オリエンテーション・キャンプ

——上智大学新入生のトモダチ作り

小幡 富志男 ● 上智大学学生局長

1 オリエンテーション・キャンプの趣旨

上智大学の新生が入学して最初に参加する公式行事がオリエンテーション・キャンプ（通称オリキャン）である。入学式後、授業開始までの1週間はオリエンテーション・ウィークと呼ばれ、新生向けのさまざまなガイダンスが実施される。オリキャンは、この期間に大学のキャンパスから離れた場所で、1泊2日の日程で開催される。新生が仲間と出会って友を見いだし、「ソフィアファミリー」の一員として一日も早く学生生活に慣れ親しむことができるようにと、1966年に他の大学に先駆けて始まった。

2015年度は、オリキャン実施に先立って、参加する教員や「ヘルパー」と呼ばれる上級生に対して、学生

センター主催の事前説明会を開催した。説明会の冒頭、早下隆士学長はオリキャンの趣旨・目的を説明するに当たって、上智大学の設立母体であるイエズス会の教育理解に言及した。

「イエズス会の理解では、『学校は知識や技能を次の世代に伝えるために設けられた特別な教育の場であり、この学校教育と並んで、もしくはそれ以上に人間形成において大きな役割を果たしているのが家庭や遊び仲間、同志団体による影響である』としています。そのため、このキャンプには新生と教員だけではなく、『ヘルパー』と呼ばれる上級生が参加することに意義があります。ヘルパーの皆さんは、1泊2日、遠方の地で新生と寝食を共にし、レクリエーションにより懇親を深め、先生方と協働しながら学科のカリキュラムの説明や履修登録の

神が芽生え、その精神を発揮して、毎年のように多くのヘルパーが名乗り出てくださり、オリキャンの伝統と歴史を築き上げてきたのです。こうした精神は、まさに本学の教育精神『他者のために、他者とともに』(Men and Women for Others, with Others)に合致するものであります。」と。

オリキャンは現在まで約50年もの歴史を積み重ねて、上智大学の全人教育を象徴する歴史的行事に発展してお



現在のオリエンテーション・キャンプ

アドバイスを通じて信頼関係を育むなど、キャンプにおいて新入生の大きな精神的支柱となっていくわけです。先輩と後輩、また教員との間で、教える者と教

わる者の相互依存関係を構築することで、自分が学んだことを、次は他人の役に立たせるという精神に立たせるという精

り、本学の全学部全学科の構成員が、全員で協力して新入生を迎え入れるということにこそ、このキャンプの根幹的意義がある。

2 リーダーズ・キャンプ

オリキャンの先駆けとなったものに、リーダーズ・キャンプがある。第1回リーダーズ・キャンプは、河口湖畔で1959年7月に4泊5日の日程で行われた。大学と

は「教える者と教えられる者との精神的共同体」とする本学の基本的大学観を学生たちに体験的に伝えようと、時の学生部長フランツ・ボッシュ神父の提案により実現した。とはいえ、これは大学主導型ではなく、学生の自主的活動を大学が支援するというコンセプトのもとに、当時学生



リーダーズ・キャンプ

会に所属していたクラブ活動団体のリーダー数十名が教職員と共同生活することによって、相互の信頼を深め、課外活動の意義を探り、愛校心を高め、そして望ましい学生のあり方を深めようとするものであった。

参加者数は80人、主なテーマは「課外活動」「リーダーシップ」「建学の精神」についての討論であった。その後、毎年参加者が増え、キャンプ地を変えながら実施されたが、1964年の第6回を最後に、その後の記録は見当たらない。その代わり、2年後の1966年に第1回オリエンテーション・キャンプが開催されている。

3 第1回オリエンテーション・キャンプ

1966年の第1回オリキャンは、不安と緊張の中で行われた。何しろ、全学部全学科1719人の新入生を対象にした研修合宿など前例がなく、企画・運営を担った学生部は祈るような気持ちで一步を踏み出した。この年は4月4日に入学式が挙行され、4月5日～6日が外国語学部と法学部、6日～7日が文学部、7日～8日が理工学部と経済学部と、学部学科ごとに日程をずらし、1泊2日で箱根高原ホテルならびにホテル芦ノ湖園で行われた。第5代学長大泉孝神父と各学部・学科長のあい

さつの後、映画「上智大学五十周年」を鑑賞。続いて、各学部学科別集会に移り、夜遅くまで教授を囲んでの話に花が咲いた。

キャンプ実施後の新入生アンケートでは、「来年も続けるべき」という高い評価が圧倒的で、この企画は大成収めたのである。その後、毎年実施されるようになり、場所は箱根や山中湖畔のホテル、1983年からは御殿場の東山荘などで行われるようになった（2011年は東日本大震災のために中止）。

4 現在のオリエンテーション・キャンプ

2015年度のキャンプは4月3日から6日の間に、御殿場、山梨、八ヶ岳山麓の3か所で実施した。全学科



第1回オリエンテーション・キャンプ



現在のオリエンテーション・キャンブ

に共通のプログラムが「学長講演」である。学長1人が3会場すべてに登場するのは困難であるため、学務担当・学術交流・学生総務担当の3副学長が手分けして各会場に赴き、上智大学の教育精神を中心に「大学で学ぶことの意義」について講演を行った。大学のトップが直接新入生に対してメッセージを伝えることの意義は大きい。また、学長がキャンパスを離れた場所で新入生と交流することにより、親近感が増すとともに、自ずと大学への

帰属意識も高まる。

筆者も入学後すぐのオリキャンで、バスを降りた途端に、現地で待ち受けていた当時の学長ヨゼフ・ピタウ神父から握手を求められたことは、強烈な思い出になっている。

もう一つの必修プログラムがキリスト教人間学の説明であ

る。本学のアイデンティティ科目であるキリスト教人間学は、キリスト教的な観点をベースに「思索の基盤を深める」「キリスト教の精神に学ぶ」「人間として生きる」「よりよい世界をつくる」という4つの基本区分で構成されており、学生も教員も、みずからの成長に真摯に取り組み、他者とのかわりを大切にし、倫理的思考と判断力を備え、地球的な視野に立ってより人間的な世界を築き上げる人間になることを目標としている。キリスト教人間学を通して、本学の教育の源泉への関心を惹起し、
 “Men and Women for Others, with Others.”という教育精神を新入生に説明することにより、上智大学に学ぶ者としての覚悟や、大学生活での人間関係構築に重要な示唆が得られることを期待している。

その他に、3回の学科集会が組まれている。内容は各学科で異なり、担当教員とヘルパーが協働でプログラムを作成・実施する。学科のカリキュラムの説明、履修登録の仕方、ロヨラ（上智大学の履修登録等学生支援システム）の使い方など、新入生の知りたい情報が効率的に得られるように学科ごとに工夫を凝らしている。新入生同士の親睦や、教員・ヘルパーとの交流を目的としたレクリエーションに時間を割いている学科も見受けられる。

中でも、ヘルパーが準備に数か月を費やしたゲームやスポーツは、親睦を深める良い場となっている。また、新入生と教員・ヘルパーとの間で話題が尽きず、深夜まで歓談が続くことも多い。

キャンパス実施後、学生センターでは新入生に対してアンケートを実施する。2014年度のアнкケートは、施設や食事といった項目から、学長講演、キリスト教人間学、学科の第1集会、第2集会、第3集会それぞれについて、①とても満足 ②やや満足 ③普通 ④やや不満足 ⑤とても不満 というように数値化できる設問形式を取り、その回答に至った理由を自由に記述する。オリキャン全般の満足度は、「とても満足」が59・3%、「やや満足」が31・5%で、新入生の90%以上が満足している。

5 オリエンテーション・キャンパスの展望と課題

いったん採用したものの、費用がかかるうえに目に見える成果が得られないという理由で廃止する大学が多い中、1966年から毎年開催されているオリキャンは、上智大学の特徴ある行事の一つとなっている。とはいえ、これまで順風満帆だったわけでない。運営する学部学科の負担も大きいため、合宿形式のキャンパスの意義に疑問

の声が上がリ、見直しや改善策などが検討された時期もあった。実際、3000人を超える新入生と教員・ヘルパーを何十台ものバスに乗せて遠隔地で行うオリキャンについて、費用対効果の観点から、学内で実施すべきであるという意見もある。しかしその都度、当時の学長がリーダーシップを発揮し、「オリエンテーション・キャンパスの継続」というバトンを繋いできた。キャンパスを離れて合宿形式で実施するからこそ、単なるガイダンスだけでは終わらない「トモダチ作りの場を提供する」という強い意思の表れになるのである。

最近では社会情勢の変化や学生気質の変化に伴い、オリキャンのあり方も変革を求められている。ここでいくつかの点を課題として指摘したい。

合宿形式で他の学生と寝食を共にすることに困難を覚える新入生が増えてきており、各学部学科ともその対応に苦慮している。行き帰りのバスやホテルの部屋といった閉じられた空間に他人と居ることに苦痛を感じる学生や、オリキャン実施前から各学科や学生センターに相談に来る学生も増加傾向にある。こうした学生をサポートするために、看護師（場合によってはカウンセラー）の同行をお願いする場合もある。一昔前は新入生同士の距

離を縮める上で有効であるとの考えから、レクリエーションでの一発芸を当たり前のように行っていた。新入生アンケートによれば、「一発芸で場が和んだ」という肯定的な意見がある一方、「一発芸の無茶振りはやめてほしい」「たいへん苦痛に感じる」と回答する学生が多くいることから、各学科に対して「一発芸などは決して強制しないように」との通達を出すことになった。

また、本学でも履修登録の方法がインターネットを利用したものになり、ほとんどの学科がロヨラの利用方法の説明をオリキャンの学科集会に取り入れている。3つのキャンパス地におけるWi・Fi環境は、地理的・物理的制約から必ずしも十分に整っているわけではない。こうした施設面の問題を改善することも学生センターに求められ、2015年度はレンタルポケットWi・Fiを持ち込み、回線容量に制限はあるもののWi・Fi環境を準備することにした。一方で、カリキュラムの説明や履修登録の方法などにかける時間が従前より増える傾向にある。新入生にとっては大切な知識だが、本来の趣旨である新入生同士の親睦、「トモダチ作り」に支障が出るようでは本末転倒となる。

LINEやFacebookなど、SNSの普及によ

り人間関係が希薄化する現代にあつて、多少の困難はあつても同じ新入生が合宿をし、顔と顔を突き合わせて自分を語り、将来の夢を語り合う場を提供することは、生涯の友人を作るという点でたいへん意義深い。もちろん、履修登録の方法やカリキュラムの説明など、学習に関するサポートを行うことは新入生の不安を取り除き、円滑に学生生活に入っていくために重要なプログラムである。

しかし、オリキャン実施後に新入生の声を拾ってみると「泊まりがけで生活することで、自然とたくさんの人と関わりを持てて、非常に満足している」「行くまでは本当に憂鬱で不安だったが、話す友達もできたので感謝している」。「多くの人と交流ができ、同期生の意志の強さや長所をたくさん見つけることができた。多くの友を尊敬するようにになった」「このキャンパスには、私たちがお互いに知り合い、距離を縮めるためのきっかけのようなものが散りばめられていた」という、オリキャンに対して肯定的な感想が多く聞かれた。この種の感想は、筆者が学生時代に感じた思いと本質的に変わっていない。教育の原点という意味で、オリキャンが今後も生身の人間同士のコミュニケーションを大切にする場であることを切に願うものである。



新入生歓迎セミナーについて——専修大学における試み

阿藤 正道 ● 専修大学商学部教授・学生部長

1 新入生歓迎セミナー実施の経緯

大学に入学したものの、大学生活になじめずに退学していく学生も少なくない。その理由は不本意入学、経済的理由などさまざまであろうが、入学前に抱いていた期待と現実のギャップから入学した大学を好きになれず、信頼できる友人をつくることもできず大学をやめてしまう学生もいるように思われる。新入生に、これから自分が学ぶ大学のことを知ってもらい、良いスタートを切ってもらうことができれば、中途退学する学生を少しでも減らすことにつながるのではないか。そのような機会を設けるべく、専修大学では2008年より毎年、2泊3日の新入生歓迎セミナーを実施している。2008年4月30日～5月1日に行った第1回セミナーは、4月以降に新入生に参加を呼びかけたが、この時の参加者はわず

か11名であった。しかし、参加した新入生には大変好評であったため、翌年度以降もこのセミナーを続けていくことになった。

入学直後の時期には各種ガイダンスや履修登録など多くの行事や手続きが控えているため、新入生歓迎セミナーを実施することは困難である。そこで、2009年度の第2回セミナーからは入学直前の3月下旬に実施することとし、入学手続書類に新入生歓迎セミナーの募集パンフレットを同封して電子メールによる参加申し込みを受け付けることとした。また、エクスカーションとして学生たちに極めて人気の高い遊園地（富士急ハイランド）へのツアーを組み入れた。その結果、参加申し込み者はかなり増やすことができた。本セミナーの引率者には学生部担当の専任教員3名、学生生活課および学生相談室の職員5・6名に加えて、サークル活動や海外研修など、

さまざまな形で活躍中の先輩学生12名を配している。宿泊は専修大学所有のセミナーハウスを利用し、募集人数は先着60名、参加費は1万4000円である。

2 2015年度新入生歓迎セミナーの内容

本年3月23日～25日に実施したセミナーを紹介する。今回参加した新入生は30名（昨年44名）であった。23日午前9時30分、専修大学生田キャンパスに集合し、参加費用の徴収手続きの後、開会式を行った。学生部長あいさつ、引率教職員および先輩学生の紹介後、大型バス2台に分乗して東名高速道路を経由して専修大学箱根セミナーハウスに移動した。セミナーハウスでは昼食後、学生相談室カウンセラーの指導によるアイスブレーキング（仲間探しゲームなど）およびグループワークを行った。ここでは参加者を6グループに分け、『若い女性と水夫』という課題を提示し、ディスカッションを通してコミュニケーションの楽しさ、難しさ、大切さを体験するグループワークを行った。

夕食、入浴の後には「先輩学生たちの話を聞こう」というセッションが行われた。先輩学生が、サークル活動、海外研修、ボランティア活動などの体験に基づくプレゼンテーションを行い、新入生からは活発な質問が出された。

2日目は富士急ハイランドへのツアーである。遊園地で楽しく遊ぶだけではなく、大学生らしい問題意識を持つてほしいということで、「2020年を見据えた富士急ハイランドの戦略」というプレゼンテーションのテーマを与えた。このテーマのもと、班ごとにアイデアを出して3日目午前中にプレゼンテーションをしてもらう旨を参加者に伝えた。箱根セミナーハウスから富士急ハイランドまで約2時間のバスの車中、大学の歴史の紹介も兼ねて、専修大学の創立者たちの姿を描いた専修大学創立130周年記念映画「学校をつくろう」を上映した。

富士急ハイランド到着後は、園内は班単位の自由行動とし、各班に先輩学生が付き添った。午後4時にバスに戻り、6時過ぎに箱根セミナーハウスに帰った。

夕食入浴の後、プレゼンテーションとはどのようなものか、教員から簡単な説明を行った後、各班に分かれて意見の集約とプレゼンテーションを行い、新入生からは活発な質問が出された。



ゼンテーション用ポスターの作製作業を行った。それぞれの班には先輩学生が付き添い、アドバイスしたりしていた。手際よく意見をまとめ早々とポスターを作製する班もあれば、議論が白熱してなかなか意見がまとまらない班もある。就寝時間までの限られた時間内に皆の意見をまとめ、ポスターを作製することは意外に難しく、時間延長の希望も出されたが、健康管理の観点から30分延長するにとどめ、午後10時30分にはすべての作業を終わらせた。このように、限られた時間に収めるよう指導している。

3日目の午前9時から、各班によるプレゼンテーションと質疑応答が行われた。前日に作製したポスターを利用して各班はまとめたアイデアを発表。持ち時間は口頭発表8分、質疑応答2分、先輩学生からのコメントなど2分とした。また、引率教員が審査にあたり、優秀な発表を選定した。今回は、次のテーマでプレゼンテーションが行われた。

・オリンピックに向けたスポー

ツバー

・富士城



- ・おもてなし
- ・素敵なツアーへご招待
- ・チャリティでつなぐみんなの輪

・外国人獲得計画

各班とも、限られた条件の中でさまざまな工夫を凝らしたプレゼンテーションを行っていた。

プレゼンテーション終了後、



昼食をとり、セミナーハウスを出発してバスで芦ノ湖畔に移動し、箱根駅伝ミュージアムを見学。次いで、バスで小田急線向ヶ丘遊園駅前の専修大学サテライトキャンパスに移動。閉会式では各プレゼンテーションに対する講評の後、優秀な発表をしたグループに記念品が贈られた。最後に参加者全員に振り返りシート（アンケート）を配付し、セミナー参加の感想などを記入させた後、覚えたばかりの校歌を全員で斉唱して解散した。

3 過去の事例から気になる点、問題点

本セミナーは、2泊3日の短いスケジュールの中にさまざまな内容がぎっしり詰まった密度の濃いセミナーと

表2 振り返りシートの集計結果より

新入生歓迎セミナー参加者の感想
(抜粋)

- ・最初は不安だったが、セミナーに参加したことで大学生活に自信を持って臨めそう
- ・意見を交し合うことが思った以上に楽しいものだった
- ・反対意見でも最後まできちんと話を聴いてくれた
- ・みんなで作り上げたプレゼンテーションは一生の思い出になると思う
- ・入学前にさまざまな学科の新しい友達ができた
- ・コミュニケーション能力の重要性を学んだ

満足度調査

大いに満足	やや満足	満足	やや不満	大いに不満	未回答
61%	23%	9%	0%	0%	7%

参加者が記入した「ふりかえりシート」の感想をみると、本セミナーの満足度が極めて高いことがわかる。親から勧められて半ば渋々参加したという学生からも、参

4 今後の展望について

なっており、ほとんどの参加者から非常に高い満足度を得ている。一方、このようなスケジュールや集団行動についていくことが苦手な新入生も見受けられることがある。そのような新入生がいた場合は、学生相談室のカウンセラーなどと相談の上、無理をさせずにグループワークから外して休憩させる、場合によっては、引率者が付き添って先に帰宅させるなどの対応をとることになっている。

加して良かったという感想を得ている。参加した新入生に対して、高校生から大学生につながる良い動機付けができたと考えている。できる限り多くの新入生に参加して欲しいと願うところであるが、新入生全員にこのようなセミナーを実施することは施設などの制約もあり不可能である。専修大学に入学する新入生約4000名に対して、本セミナーの募集定員は60名にすぎない。今後、より多くの新入生が参加できる形態としてどのような方法があるか、試行錯誤を繰り返しながらさまざまな工夫を試みていきたい。

また、新入生歓迎セミナーの募集期間は、入学手続き後から3月下旬となっている。この数年間は徐々に申込者が増える傾向にあるものの、募集定員60名を超過したことは未だない。今年度は開催当日のキャンセルもあり、昨年よりかなり少ない30名であった。国公立など他大学の合格発表を待って、最終的に本学に入学を決める受験生も少なくない。専修大学は第1志望ではなかったという新入生にこそ、このセミナーに参加してもらいたいと考えている。入学手続きから入学までの短い募集期間に、新入生にどのように呼びかけていくかも今後の課題となっている。

学生を孤立させない取り組み

——ビッグシスター・リトルシスター制度を中心として——

西村 公雄

●同志社女子大学学生部長

1 寄宿学校として始まった同志社女学校

同志社女子大学のルーツは、現在の京都御苑内にあった旧柳原邸（現・京都迎賓館あたり）を借りて始められた女子塾開設（1876年）にさかのぼる。その後宣教師達が「京都ホーム」と呼んだ最初の校舎が建てられた（図1）。「2階が寮、1階が教室」という造りの学舎で、宣教師と生徒が同居し、教室だけでなく寮（寄宿舎）での規律正しい日々の生活を通じてキリスト教的感化および教育を行っていたのである（表1）。部屋はもちろん相部屋で1部屋2～3人、7～8人の部屋もあったと記録されている。もちろん学年は、ばらばらで、一期ごとにある部屋替えの時は、「親しきおっかさんや愛せし妹を送り出して、新しきおっかさんと妹を迎える」と言った風

情で、同居生活を通じて、友達以上の家族としての関係が培われていったようだ。今でも、本学の寮は2寮とも二人部屋となっていて、上級生と下級生が同居し「上級生が下級生の道案内をつとめる」という方式をとっている。特に、みぎわ寮では同室

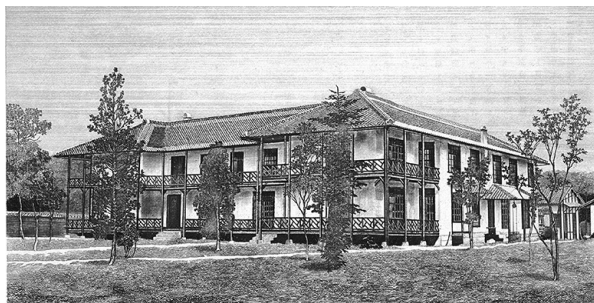


図1 女学校最初の校舎（版画）

上京第十一区今出川通（現・今出川キャンパス）に移転後の校舎。米国のキリスト教婦人団体の募金により1878年7月に竣工した。京都で一番古いキリスト教主義の女学校で、当初から国際性を備えていた。

（同志社大学同志社社史資料センター提供）

表1

宣教師文書 (Anna Y. Davis から Mr. Nathron 宛書簡。
1883年10月8日) に記録されている当時の時間割

A Program of Daily Exercises

5:30 AM	Rising Bell/Breakfast Prepared/ House in order before 6:50
6:50-7	Private Devotions or Quiet Hour
7:00	Breakfast Devotions at 8 o'clock followed by Recitations until 12 o'clock
12:05	Dinner
1:15-4	Recitations, Sewing, and Eti- quette Class
4-5	Exercise
5:00	Supper
6-6:30	Section Prayer Meeting in various room
6:30-7	Evening Devotions
7-9	Study Hour
9:15	Retiring Bell

坂本清音、同志社女子大学史料室編：
同志社女子大学 寮の100年、同朋社 京都 p.23 (2006)

の先輩を「ママさん」、新入生を「ベビーちゃん」と呼ぶ少し風変わりな風習がある。新入生が入学する前に同室予定の上級生は「日用品は近くで買えるので持ってこなくてもいいですよ」などと丁寧の手紙をしたため、遠隔地からやってくる新入生が京都での寮生活をスムーズに始めることができるよう心を配っている。創立当初、90%程度を記した寮生の比率も時代を追うごとに減少したが、1949年に新制同志社女子大学になっても約40%

を維持していた。しかし、その後周囲に大学生用のマンションが建設されてくるに従い入寮希望者は、どんどん減って行ったのである。また、学部学科の増設に伴い、在学生の人数も多くなり(1876年創立当初は、12名であったものが、現在では約6500名に達している)、自然と寮生の比率は、小さくなってしまった(現在は、約3%)。

2 教育寮の精神を引き継ぐビッグシスター・リトルシスター制度

新入生の入寮生比率が減少することで、上級生との接点が希薄となった学生が新しい生活になじみにくくなっている状況を憂い、1957年に「ビッグシスター・リトルシスター制度」が発足した。この制度は、入学早々、大学の様子が分からなくて困っている新入生(リトルシスター)に対し、学生生活全般にわたって良き相談相手・友人となってくれる上級生(ビッグシスター)を紹介し、できるだけ早く新しい環境に慣れ大学生活に順応してもらえるというもので、色濃く教育寮で培われた精神を引き継いでいる。現在、リトルシスターは、寮生を除く新入生(自宅通学生・下宿生)が対象でビッグシスターは、

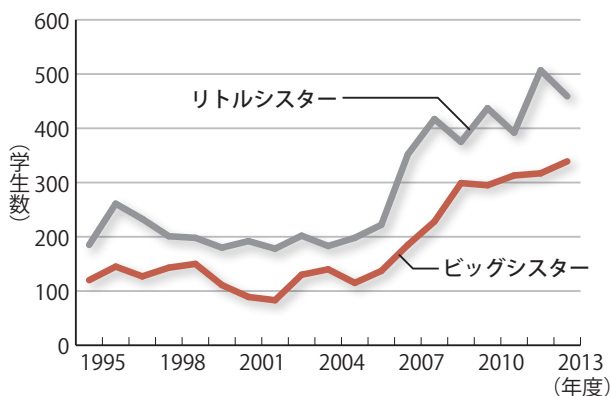


図2 ここ20年間のビッグシスター、リトルシスター数の推移
(学生部統計)

2年次生以上の学生なら誰でも志願できる。学科や出身地・現住所などの地理的事情、趣味その他必要事項を参考にしながら学生部がマッチングを行い、双方に紹介状を送付する。招待状が届くとお互いに連絡を取り合い活動が始まるのである。活動は、原則的に学生の自主性に任せているが、経済的にも精神的にもお互い負担のない

交友関係が望まれる。具体的な活動としては、①キャンパス内およびキャンパス界隈の案内②履修登録、課外活動、その他入学当初必要なアドバイス③下宿生、通学生のためのアドバースなどが行われている。新入生は、この制度

を通じていつも頼れる心強い相談相手を得ることができるのである。また、往々にして、先輩後輩という関係性を越えた良き友人として、長く交流が続くビッグシスターとリトルシスターも多いようだ。リトルシスターを経験した新入生は、2年次生以上になると今度は、恩返しとばかりに、新たな後輩を導こうと自分がビッグシスターに名乗りを上げることも多い。発足当初は、80名のリトルシスターに対して、82名のビッグシスターが名乗りを上げたが、近年は、400名強のリトルシスターに対して300名を超えるビッグシスターが手を上げるまでに成長してきた(図2)。もちろん、毎年潤沢にビッグシスターの希望者が自発的に名乗りを上げてくれるとは限らない。各学科で希望者数の過不足が生じ、バランスを欠くときや全体的に不足する年度も起こりうる。が、その際は、後で述べる課外活動などへの参加経験のある学生を主として、学生部から呼びかけるといって快く承諾してくれる。彼女たちにしみ込んでいるボランティア精神のおかげで、ビッグシスター・リトルシスター制度の存続が危機に瀕したことはない。それだけ、学生の間にも定着した制度と言える。

3 ビッグシスターの心構え

ビッグシスター希望者が確定すると年度末に招集し、ビッグシスターの会と呼ばれるオリエンテーションを行う。これは、規律を持って新入生の道案内人となる心構えを学ぶものである。学生部の指導の下、1. ビッグシスターは、新入生（リトルシスター）のよき相談相手であるという定義付けを行い、2. ビッグシスターの具体的活動について資料（表2）をもとに説明し、活動範囲を明確にする。3. ビッグシスター経験者からのアドバイスを受け、4. 各グループ分けをした中で自己紹介などを行いビッグシスター同士の連携も確保する。このような会を設けて、「ビッグシスター・リトルシスター」制度の意義を再確認するとともにビッグシスターの心構えをしつかりと胸に刻んでもらい、逸脱した行動をとらないよう自覚を持たせている。この「ビッグシスター・リトルシスター」制度は、（公財）大学基準協会の大学評価においても高く評価されている。今後も、多くの新入生が、リトルシスターとして、ビッグシスターに導かれるように内容の向上および制度の充実を図って行く所存である。

表2 ビッグの会にて用いられるビッグシスターとしての具体的活動を示す資料

ビッグシスターの活動について

1. 趣旨

大学生活では、学問の真剣な追究と人間形成への自主的な努力を必要とする以外に、大学の生活を通して得られる学生同士の人間的な交わりが非常に尊い経験です。本学のビッグシスター活動は、1957年に、全国各地から集ってくる学生の間に友愛の美しい関係を発展させることを願って始まりました。ビッグシスターは、新入生に対してよき相談相手、よき助言者となるよう、有志の上級生に学生課が委託する形式をとっています。

1. ビッグシスターのリトルシスターに対する具体的な活動

- (1) 新入生が入学のために京都に到着する時、必要であれば駅に迎えに行く。
- (2) 入学式の当日は心細く、初めてでまごつく事も多いと思われるので、要領を教える。
- (3) 登録や、入学当初に必要なことについて相談にのる。
- (4) 大学構内や附近の地理、建物について、案内する。
- (5) その他、学生生活に必要なと思われるアドバイスをする。

1. その他

- (1) ビッグシスターが経済的に負担を負うことは、この活動の維持のためには好ましくなく、新入生に余計な精神的負担を与えることにもなるので、普通の友達として交際する気持ちで続けるのが望ましい。
- (2) 娯楽に誘うこと（映画、音楽など）は親密になるためのよいチャンスだが、学生生活にとってマイナスとなることもあるので最小限度にする事が望ましい。
- (3) 困った場合、遠慮せず学生課に連絡する。

表3 本学薬学部医療薬学科の新入生オリエンテーションスケジュール抜粋

赤文字はオリエンテーションリーダーが活躍する行事

月 日	行 事
4/3(金)	学部長あいさつ
	履修登録説明（教務課）
	教職員・オリエンテーションリーダー紹介 クラス別ミーティングなど
	英語プレイスメントテスト
4/4(土)	学外オリエンテーション【1泊2日】 （アヤハ レークサイドホテル）
4/6(月)	学生生活案内（宗教部） 防犯講習会（学生課）
	創立者墓前礼拝
4/7(火)	Web 履修登録、在籍カード提出。
	個人カード、アドバイザーカード、 住所登録用紙、通学定期券区間届等提出。
	教科書販売
4/8(水)	情報倫理講習
	薬学部ホームページの利用方法
	定期健康診断
4/9(木)	学生生活案内
	学生会による歓迎行事（クラブ紹介）
	新入生交流会

4 上級生が下級生の道案内をとめる

本学も今や毎年約1500名の新入生が入学してくる大学に成長してきた。事実、新入生の3分の2ほどは寮やビッグシスター・リトルシスター制度の恩恵を受けていない現状がある。そこで、全新生が、早く、多くの友に恵まれ、スムーズに大学生活をスタートさせることができるように入学式から約1週間かけて「新入生オリ

エンテーション」を実施している（表3）。他大学でも行われているオリエンテーション（登録相談や教育理念・図書館の利用法などの説明）のほか、本学では、学科別のプログラムを設けている。上級生がオリエンテーションリーダーとなって、学科によっては、キャンパス案内や親睦会を行い、1泊2日の学外でのプログラムを企画するのである。また、「新入生オリエンテーション」の最終日に催される新入生交流会では、新入生を歓迎して、在学生、教職員、卒業生が一堂に会し、出身地域ごとにテーブルを囲み学部学科を超えて親睦を深める。これらのプログラムも「上級生が下級生の道案内をとめ、たとえ横のつながりを広げる」本学ならではの取り組みと言える。種々のプログラムを通じて、新入生同士はもとより、先輩・教員・卒業生との距離もぐっと縮まる。困ったときには、新しくできた友にも先輩にもそして教員であるアドバイザーにも相談しやすくなるよう工夫しているのである。

5 在学生も孤立させない

本学では、新入生のみならず在学生に対しても多くの課外活動を準備して、仲間を広げる仕組みを設けている。その最たるものがキャンプとリトリート（修養会）だ。いずれも宗教教育活動の一環として実施されたものであった。これらの行事には、講師を招いての講演や礼拝・讃美の時間を持つことが重要視され、今もその伝統は、受け継がれてきている。キャンプは3泊4日、リトリートは、1泊2日でそれぞれ年2回行われる。キャンプでは、プログラムの企画から実行まですべて参加学生が中心となっていく。各人がおのおの役割を担って事前に準備し、作り上げて行くのである。一人一人が役割を果たす中で互いの顔を覚え、交流が広がる。リトリートでは、学生実行委員長の下、プログラムが進行する。お互い心を開いて語り合い、心を通わせるひとときは日常生活ではなかなか経験できない。このような時間を共有することで、友達関係が一気に広がって行くのである。そのほか、海外研修や本学の創立者の新島襄・八重夫妻の足跡をたどる会津若松・安中・函館ツアーなどが企画されていて、貴重な体験とともに友達の輪を広げられる機会が設けら

れている。

6 同志社の原点

本学の課外活動にはそれぞれ実施目的があり、その目的を果たすためには学生や教職員の立場を超えて交流し協力し合うことが不可欠である。かつて、創立者である新島先生は勝海舟に「大学の完成には200年かかる」と答えられた。また、新島は1890年（明治23年）に臨終の際に「社員たるものハ生徒ヲ鄭重ニ取扱ふ可キ事」という言葉を遺している。これは、同志社においては、教職員、学生もみな心をも一つとする同志であり、そこは一切の隔たりがあるべきでないということを意味する。同志社創立から140年が経過しようとしているが、我々はみな、理想の教育を成熟する途上の「同志」であるとの新島の意志が脈々と受け継がれてきている。新入生を「同志」として迎える取り組みこそ、本学の教育理念に基づいた友達づくりの諸制度の原点と言えるのである。



学生寮（教育寮）と新入生キャンパス——順天堂大学のとりくみ

長岡 功 ● 順天堂大学医学部教授・学生部相談役

松本 顕 ● 順天堂大学医学部准教授・啓心寮総寮監

1. はじめに

順天堂は1838年に学祖・佐藤泰然によって蘭方医学塾として開塾され、現在の第9代堂主・小川秀興理事長まで繋がる、177年の歴史を有する日本最古の医学教育機関である。現在の順天堂大学は、医学部、スポーツ健康科学部、医療看護学部、保健看護学部、国際教養学部の5学部を擁する健康総合大学となっている。医学部の1年生はスポーツ健康科学部のある千葉県印西市のさくらキャンパスで一般教養課程を履修しており、両学部の1年生全員が同キャンパス内の学生寮（教育寮）で共同生活を体験している。

開塾以来、伝統的に、教職員と学生、先輩と後輩、同級生どうしの距離が近く、互いに面倒見がよい。留年率

が低く、国家試験合格率が高いことにも、その伝統が生かされている。新入生教育にも力を注いでおり、学部ごとに特色のある取り組みを行っているが、本稿では筆者らの所属する医学部における教育寮と新入生キャンパスについて紹介する。

2. 教育寮

(1) 寮の概要

開塾以来、順天堂で行われてきた医学教育は、その後、明治時代から昭和にかけて、順天堂醫事研究会、順天堂医学専門学校へと受け継がれた。そして、1946年に順天堂医学専門学校が順天堂医科大学に昇格し、1947年に千葉県習志野の元騎兵砲兵学校跡に予科校舎と学生寮「啓心寮」が併設された。その後、1951年に体

育学部（現在のスポーツ健康科学部）が開設され、それ以来、2つの学部の学生が共同生活を送るようになった。啓心寮の「啓心」とは「心を啓く」という意味であり、教育目標として「自由に振る舞って然も他人に迷惑を及ぼさぬ行動ができるようになる」ことを挙げ、人格教育のための教育寮と位置付けられている。学生自身による自治的生活を旨とし、指導と助言のために教員（寮監）や学寮課職員が配されている。

現在では、500人近い学生（医学部約130人、スポーツ健康科学部約370人）が3棟の寮（男子寮2棟、女子寮1棟）で共同生活を送っており、スポーツ健康科学部の2年生37人が室長あるいは寮役員として1年生の指導を行っている。1993年度までは医学進学課程（2年）が習志野キャンパスあるいはさくらキャンパスに設置されていたために、医学部2年生の室長や寮役員がいたが、1994年度以降は一般教養課程が1年間になり、医学部2年から本郷・お茶の水キャンパスで基礎医学教育（専門課程）が行われることになったため、室長や寮役員はスポーツ健康科学部の2年生が担当することになっている。

寮の居室は2人1部屋で、二段ベッドと勉強机、クロー

ゼットなどが備わっている。部屋分けは医学部生同士、同じクラブのスポーツ健康科学部生同士が同室になることがないように考慮されている。2人1部屋の居室は寝起きや勉強には支障のない広さであるが、ゆつくりと寛げる広さではない。8人ごとに1室の共通スペースがあり、テレビ、冷蔵庫、電子レンジ、ソファなどが置かれている。軽食などはここで摂り、部屋ごとのミーティングも行う。

啓心寮の間取りは、ある程度のプライバシーを確保しつつ、一方で、人間関係を構築せざるを得ないように工夫されている。ここで大きな役割を果たすのが室長である。

（2）室長

室長は、前述の8人のユニット2つ、つまり16人の中に1人が配されている。1年生（室員）と寝起きを共にしつつ、常に受け持ちの15人の室員に気を配っている。

室長の仕事は1年生の入寮よりかなり前、2月上旬の室長研修会から始まる。4月の1年生の入寮直後は、担当する室員を集めて自己紹介の音頭をとり、学内施設の説明を行い、近隣のスーパーマーケットまで室員を連れて行って寮生活に必要なものを買い揃える手伝いもす

る。朝、室員を起こして学内の食堂で朝食を摂る習慣をつけるように促すのも室長である。どの授業を受講するか相談にもなる。

室長は2年生に限定されており、年齢的にも室員と近いためか、ほとんどの場合に最初から自然な形のサポートが成立する。中には室長とウマの合わない室員もいるが、室長間で緊密に連絡し合い、居室を変更することなく別の室長がそれとなく代役を務めることもある。このようにして、1年生は入寮直後から、学部を超えた幅広い濃密な人間関係を構築し、この関係は生涯続くことになる。

(3) 寮のイベント

寮祭は6月初旬の週末に3日間開催されるが、この時に中心になって活躍するのも室長である。ただし、室長が寮祭を運営し、1年生は観客として楽しむというわけではない。入寮から日が浅いため、おおまかな企画などは室長がお膳立てするが、寮生全員が何らかの役割に立候補し、自主的に寮祭運営にコミットするように促すのが室長の役割である。また、室長は個々の学生の個性やクラブの練習時間なども考慮し、1年生ができるだけ積

寮祭（看板準備）



寮祭（ステージ発表）



極的に寮祭運営に携われるように相談や調整を行う。このため、寮祭は1年生にとって、自分たちによる手作り感、思い入れが強く、学生時代の鮮烈な思い出となる。1年生は、寮祭準備を通して寮の部屋割とは別の新しい出会いを経験し、共通の目標達成に向かって強い人間関係を築いていくのである。

寮祭を大学祭シーズンの秋ではなく、あえて入寮2か月後の6月初旬に行う理由の一つは、1年生の人間関係



祭祭・御神輿（駅前での地域交流）

構築を促すことにある。また、祭祭準備という期限の決まった大きな目標に向かって、共同で準備作業に取り組むことによって、5月病対策を狙っている面もある。さらに5月にはスポーツ大会なども催されるが、祭祭と同様の効果を狙っている。

(4) 室長の質の担保

以上のように、1年生の人間関係構築に果たす室長の

役割は極めて大きい。したがって、室長の質をどう担保するかは重要な問題である。

室長を束ねる寮長などの寮役員は学生の立候補制で、1年生の冬に数回の書類・面接選考を経て、男子寮、女子寮それぞれの寮生総会での投票により決まる。

その後、室長が募集され、現・次期寮役員や寮監（教員）による書類・面接選考を経て残寮の可否が決定される。

啓心寮の伝統を受け継ぎ、1年生の世話役を買って出る志のある学生の中で、同級生に「後輩を任せられる」と承認されなければ寮役員や室長にはなれない。このようにして、人格面や生活態度によって室長の質が担保される。投票する側も1年間過ごした啓心寮への思い入れがあり、寮生総会にはほぼ全寮生が出席する。良き伝統に支えられて室長の質が担保されて来たと言える。

(5) 寮監・学寮課職員の役割

室長は大学2年生であり、経験が浅いことは否めない。そこで、実務面では寮監（教員）と学寮課職員の助言や指導が重要になる。最も力を入れるのは、新入生受け入れ準備のための室長研修会である。冬期は2日間、春期は3日間にわたって、朝食から夕食まで共にし、缶詰め状態で寮監や学寮課職員が研修に付き合う。また、9月には1年生の副室長も参加して、2泊3日の夏期室長研修会が大規模に行われる。

研修会の内容や方向性は学生の主体性に任されており、寮役員が原案を作る。寮監・学寮課職員は、各研修会前

に寮役員と事前の打合せを数回行い、足りない部分や気になる点を指摘する。研修会中の議論の方向性や確認事項なども、基本的には学生に任せ、学生自らが問題点に気付くというスタンスで見守る。むしろ、寮監や学寮課職員からは細かい指示を出さないほうが、自発的で、よりきめ細かい新入生サポートにつながる印象がある。

寮の運営についても、門限や禁酒禁煙など必要最小限のルールは大学側で定めているが、基本的には学生の自主性に委ねている。週1回の清掃、リサイクルごみの分別・収集、寮の洗濯機の掃除に至るまで、学生の話し合いで分担が決まる。日々の寮運営を通して、1年生は他の部屋や別の棟の学生とも自然に交流を持つようになる。この面でも、集団生活に不慣れな1年生を指導する室長の役割は大きい。

一方、学生の急な病気や寮内でのトラブルに最初に対応するのも室長であるため、緊急連絡網の整備や室長へのAED講習会などは大学側で行っている。また、寮監は室長会を月1回開催し、寮での諸問題や1年生の様子に関して詳細な報告を受けている。特に1年生のメンタル面での早期ケアには、室長からの情報が極めて有用である。

(6) 自発的な共同学習の促進

最後に、寮生活の教育効果の一つとして、自発的な共同学習について触れたい。試験期間が近づく、医学部1年生が集まって勉強している光景をよく目にする。寮生活において友人が多くでき、また、集まりやすいためにこのようになる。この習慣は退寮後も続き、医師国家試験前の勉強会にも生かされている。医学部だけでなく、スポーツ健康科学部の寮友との共同学習も普通に行われている。

医学部生は、国際大会級のアスリート学生を身近にして、彼らの才能や努力を素直に尊敬し多様な価値観を身に付けることができる。これも寮生活の教育効果の一つと言える。

3. 医学部新入生キャンプ

順天堂大学医学部では、入学後間もない4月中旬の週末に1泊2日の研修会を行っている。この研修会是新入生キャンプと呼ばれ、2015年度で33回目となる。現在は千葉県長生郡の日本メデイカルトレーニングセンターで開催しており、目的として(A)参加者相互の交流と理解を図る(B)相互理解のための話し方・聴き方を体

験する（C）自分の将来像を語る の3つを挙げている。

参加人数は、医学部新入生約130人に対して、教職員は80人近い。新入生に直接関わる教職員はもとより、2年次以降に関わる基礎医学系講座や臨床系講座、さらには附属病院からも多くの教職員が参加する。ここでも、教職員と学生、先輩と後輩の距離が近く、面倒見が良い、という伝統が活かされている。

(1) 先輩若手医師によるトークセッション

新入生キャンプでは、前記3つの目的に対応して、3つのセッションが設定されている。1日目の午前中は、順天堂大学を卒業した若手医師3名によるトークセッションが行われる。目的（C）を主眼とし、卒業生をバランスよく組み合わせ、多様な話題提供が行われる。基礎医学研究者、臨床系医師、女性医師としてのキャリアパス、海外での研究・医療活動など、学生にとって興味・注目度の高い話題が提供され、しかも講演者が卒業生の先輩という親近感も湧くため、学生からの質問が活発に出る。

(2) 野外研修

1日目の午後は、学生9人と教員3人が1組になって野外研修を行う。主に目的（A）を指向した一種のオリエンテーリングである。野外の各所にクイズや課題が設けられており、班対抗で得点を競う。同じ班の者同士が学生・教員を問わず協力しないと課題をクリアできないため、自然に会話が促され、親しくなっていく。野外を歩きながら、1年生が普段会うことのない臨床系教員と気軽に会話できる面も、学生からは好評である。

夕食後、野外研修のふりかえりが行われる。半日の行動を追って、班ごとに、研修中の気分の変化を模造紙にグラフ化するという課題が出される。さらに、班員全員が折々の自分の感情やコメントをポストイットに書き込んでグラフの隙間に貼り付けていく。これを通して、同じ体験をしても、他人の感じ方やコメントは自分とは異なることを認識していく。仕上がった模造紙は、翌日に参加者全員が見られるように、夜のうちに実行委員が張り出しておく。他班の様子も知ることができ、他班にいる友人との会話を介して、新しい友人の輪が広がることもある。

野外研修のふりかえりは、2日目午前中のスモールグ

ループディスカッションの準備を兼ねており、野外研修が単なる野外レクリエーションで終わらないように工夫されている。

(3) スモールグループディスカッション

このセッションでは、野外研修時の班分けのままスモールグループディスカッション（以下、SGD）を行う。この数年は芥川龍之介作『藪の中』を題材に、まず班内



新入生キャンプ（スモールグループディスカッション）

で意見交換し、それをまとめた後、数班ごとに分かれて発表会が行われる。実行委員の教員が座長やタイムキーパーを務め、正式な学会発表の雰囲気を経験させることも目的の一つとしている。
同じ作品を読んで
も多様な意見がある
ことを認識した上

で、自分の意見を説明する、他人の意見をよく聞き、いったんは受け入れる、班としての意見をまとめる、他班に
対し発表・質疑応答を行うなどの実践的な能力を身に付
けるための、目的（B）を主眼としたセッションである。

班に付いた教員は自らの意見は述べず、議論の方法や
態度などに関して適宜指導する。議論が行き詰まった時
には、新しい視点や議論の方向性を示唆するが、一定方
向に議論の誘導をしないことが必要である。しかし、ほ
とんどの場合、学生の主体的な議論が途切れることはな
い。野外研修によって、班員間に信頼関係が醸されてい
ることが大きい。

(4) 実行委員会

新入生キャンプの成否は、トークセッションの人選、
野外研修の具体的な方法、SGD課題の検討、および班
付きの参加教員への説明に大きく依存する。実際に、実
行委員会では参加者全員に毎年アンケート調査を行い、
委員会内でその結果を詳細に分析して、常に改善に努め
ている。

新しい人間関係の形成に、特に野外研修が効果的なこ
とは言うまでもなく、実行委員会も最も力を注いでいる。



新入生キャンプ集合写真

野外研修のコース設定などは、野外教育の専門家（順天堂大学スポーツ健康科学部の卒業生）に負うところが大きい。実行委員も事前の下見、当日早朝からのコースの安全確認、課題の準備、研修中の見回りなどを行う。苦労はあるが、キャンプ終了後、学生間の親密さが急に増しているのを目にすると、大きな達成感を感じる。

4. おわりに

順天堂大学医学部における「新入生のトモダチ作り」への取り組みを、学生寮と新入生キャンプを中心に紹介した。いずれの場合も、共通の目標や課題達成の過程で自然に人間関係を築くしくみであること、学生の自主性を尊重すること、新入生同士だけでなく、教職員・先輩も含めた交流の中で培っていくことが特徴である。

順天堂の開塾以来、177年の伝統である教職員と学生、先輩と後輩の距離の近さ、面倒見のよさが「新入生のトモダチ作り」に反映されていると言える。

